



校長会



No.42

三重県小中学校長会 広報 第42号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com  
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり



施設一体型小中一貫校の開校に向けて

津市立美里中学校

校長 鈴木智巳

一 津市美里地域の三小一中学校が二に！

平成二十九年年度、増改築した本校（中学校）校舎に、中学校生徒と校区の三小学校の児童が集い、三百人弱の施設一体型小中一貫校が開校します。そのため、新しく規定された義務教育学校も視野に入れながら教育方針を策定し、それに沿った具体的な教育計画等を立てています。

二 施設一体型小中一貫校の利点

美里地域の小中学校長会では、施設一体型小中一貫校の利点を生かして次のような取組を行い、学力の向上・学校生活の充実・豊かな人間性・社会性の育成をめざしたいと考えています。

(一) 九年間を見通した指導・一貫した指導

① 小中学校間の急激な段差の解消、② 三部制（一～四年、五～六年、七～九年）による三度のリーダー経験と心機一転の機会、③ 小中学校の教員の乗り入れによる小での教科担任制の導入と、中での非常勤講師の解消、④ 希望する小学校教員による中学校の部活動指導

(二) たてわり活動と日常的な異年齢交流

① 児童が生徒と交流する中で、明確な目標を持つ。② 生徒が児童と交流し支援する中で、癒されたり初心に返ったり、自尊感情を高めたりする。③ 異年齢との関わり方、気遣い等を学んで、人間性・社会性を高める。

三 現在の取組と今後の課題

現在は小中共に、「学び合う学び」を大切にした授業研究を進め始めたところです。また、各校それぞれだった年間行事、総合的な学習、生徒指導方針、PTA活動等の摺り合わせや統一、日課案の作成等をしていきます。

課題は、一貫校になっても各学年一学級規模なので、一年から九年までクラス替えをすることなく義務教育を終えることです。たてわり活動以外にも、ソーシャルスキルトレーニングを行い、人との繋がりを構築する力を身につける必要があります。また、人間関係や仲間を見る目が固定化しないように、人権学習の充実と、部が変わるときの行事を工夫する必要性を感じています。

# 今日的課題の克服に向けて

## 「チーム神上」 地域人材を活用した 魅力ある学校づくり

熊野市立神上小中学校

校長 楠 卓也



熊野市西部の山間部に位置する神川町（人口三百十六人・百七十五世帯）、平成十五年四月より神上小学校と中学校が校舎を統合し、神上小中学校としてスタート。現在、児童数八名、生徒数九名、全校児童・生徒数十七名の極小規模な学校である。

地域は少子高齢化・過疎化が加速度的に進み、六十五歳以上の人口は58%を超え、昨年度末には保育所も休園する中で、未就学児童等の保護者の中には熊野市内の小学校や中学校への区域外就学を熟慮する保護者も見られる。

子どもたちは狭小な地域の中で、人を見る目や人間関係が固定化し、

子どもたち同士が自分の思いや願いを表現することをためらったり、仲間が自分を見る目を固定化していたりすることから、生き生きと主体的に活動する意欲を持ちにくい背景も見え隠れする。

しかしながら、保護者や地域の願いとしては小中学校の存続は不可欠であり、また、学校教育活動への関心も強く、諸行事等への参加や協力についても積極的であることから、子どもたちをはじめ、保護者・地域に信頼され、魅力ある学校づくりを推し進めるとともに、地域等に積極的に情報発信していく必要がある。

本年度、めざす学校像の重点事項の一つとして「保護者・地域とともに育ちあえる学校」を掲げ、その具現化にむけ、子ども・保護者・地域にとつて魅力ある学校づくりを推進した。その一環として、「土曜日の授業」等を活用し、学校開放デーとして位置づけた。このことで保護者・地域の方の積極的な学校参画を促すとともに、県の特別非常勤講師や市のま

ら、地域に住む様々な分野で活躍している「まちの達人」を講師として招聘し、子どもたちに魅力ある授業づくりを推し進めた。さらに、学校便り・学校HP・報道機関等で積極的に情報発信を行ってきた。

中学校においては五教科以外の教科は非常勤・臨免・免外等で授業を行っていることから、できる限り実習を伴う授業については地域の力や人材を活用しながら子どもたちに魅力ある授業づくりを推し進めた。

例えば、音楽科では鬼ヶ城轟太鼓を講師に和太鼓の魅力について学びあい、また、地元神川町で藍染め染色を営みながら、ギターデュオとして活動している夫妻を講師に、本年度から取り組んでいるクラシックギターの魅力について学習を深めた。体育科では必修となつているダンスの授業を地元で活動しているダンスインストラクターを講師に迎えHIP・HOPダンスを学んだ。さらに、家庭科では県立美術館内に併設されているミュゼ・ボンヴィヴァンの出口シエフの協力のもと、地元食材の鹿肉を使ったジビエ料理を調理実習の食材として取り入れ、実習するとともに、食育の観点から「命の大切さ」等についての講演会も

同時に行った。

小学校では、「茶道教室」「餅つき大会」「古代米づくり」など、地域の人材を活用しながら、日本の伝統文化や作法について学んだ。

このように、めざす学校像の具現化にむけ学校、学校評議員、友人会、区長会など、学校・地域が一体となつた「チーム神上」を組織し、その協力体制のもと実現したもので、今後あらゆる学校ニーズに対応できる組織の充実を図りながら、魅力ある学校づくりを推し進めていきたい。

## 全ての児童、職員が 元気に登校する 学校をめざして

紀宝町立鶴殿小学校

校長 栗 須 高 洋



「おはようございます！」と今日も子どもたちの元気なあいさつが飛び交う。校長室は子どもたちが玄関に向かう通路にあるため、いつも全校児童と朝のあいさつや帰りのあいさつを交わす。

今、学校現場は、社会状況や子

どもの変化を背景に、多くの課題が山積している。とりわけ複雑化・多様化する教育課題に対応し多化する学校現場の中では、疲労感を重ねる教師一人一人の教育に対するやりがいを高め、学校としての組織力を如何に充実させるかが大きな課題と言える。

四年前、途中人事で本校に赴任した当時は、教師の姿や子どもたちの姿に多くの課題が見受けられた。

それだけに現在、子どもたちの明るく元気なあいさつを聞くことは職員全員にとつて大きな喜びと言え。学校は、やはり子どもたちが元気一杯で、安心して自分の個性を発揮できる場にしていくことが何よりも重要である。そのためにも、同時に学校に集う全ての職員が元気で互いに助け合い、支え合う中でやりがいを感じ勤務できる場であればならない。

本校に赴任した頃を振り返ると、校長として何をすべきか頭を悩ませた。まずは一人一人の職員と話し合いを重ね、何でも話し合える関係づくりに取り組んだ。同時に、メンタルヘルスアンケートを実施した。「毎日楽しく学校に出勤しているか。」「精神的、身体的につらいことはないか。」等八項目の問いかけと学校の取組で気

なることを記述してもらい、必要に応じ相談にのり、書かれたそれぞれの意見を職員会議に反映させてきた。また、全員で学校経営に積極的に参加する手立てとして、数ある委員会から学校経営・企画委員会を取り出し、代表が集まり学校経営上の重要な案件について審議し、そこで作成した原案を基にさらに全体で話し合い決定する。このことで学校経営への教師の積極的な参加が見られ、会議の円滑な運用が可能になった。

年二回の学校自己評価についても、同じように全体で審議して決定し、具体的な取組につなげていく。特に評価項目以外に強み、弱みとその他で気づいたことを記入する欄を設け一人一人の意見を反映できるようにしている。そして、結果を全員参加の各グループで分析し、全体で検証する。意見の中に「形だけの評価でなく具体的に取組むことが大切である。」という声から、特別支援員と親学級担任等との月一回の支援会議や通常学級に在籍でも課題のある児童の「個人カルテ」の作成、また、児童会活動の活性化等の取組が生まれ成果を上げてきた。

これまで、学校組織の向上をめざした取組の一端を述べたが、職員一人一人がやる気を持って動き

出すとき自ずと組織は活性化し始める。今年度のアンケートでは90%の職員が「やりがいを感じる」と答えた。また、学調の質問紙調査の問いに93%以上が、「学校に行くのが楽しい」と答えた。そして、学校自己評価の「強み」では、「情報の共有と共通理解ができる」、「何でも話しやすい職場」が多勢を占めた。むしろ「弱み」にも多くの意見が見られる。チームとしての学校を創るには、時間がかかっても子ども・職員・保護者や地域の人々、みんなで見えを出し合い、語り合い、力を合わせることが改めて重要であると感じている。

### 校区学校園及び地域と連携した教育活動

鈴鹿市立天栄中学校

校長 木村元彦



一 コミュニティ・スクールによる学校づくり

鈴鹿市では、平成二十三年四月

に市内公立全小中学校をコミュニティ・スクールに指定し、家庭・学校・地域が主体的に協働する地域ぐるみの教育を推進しており、本校でもコミュニティ・スクールを基盤とした特色ある学校づくりに取り組んでいます。

本校の学校運営協議会は、校長の他、地域住民や保護者の十人で構成し、学校経営方針の承認、学力やいじめ、通学路の問題など子どもの実態に基づいた学校教育課題の協議、学校関係者評価の実施等、年間六回開催しています。特に、学校関係者評価は、保護者や地域の声を反映させた改善活動を進める大切な視点と捉え、指摘事項の着実な実施に努めています。

### 二 中学校区幼小中連携と一貫した教育を目指して

小中一貫教育の必要性が指摘される中、校区の幼稚園及び小学校との連携や一貫した教育活動の推進に積極的に取り組んでいます。

本年度は、「天栄中学校区幼小中一貫教育推進プロジェクト」を作成し、組織づくりや具体的な取組に着手しました。

まず、毎月校区幼小中学校園長会を開催する中で、校区幼小中学校園の連携と一貫した教育活動の基本方針や活動等について協議し、共通認識を図っています。

また、毎年実施している校区幼小中学校園夏季研修会で、本年度は、「幼小中一貫教育による学びと育ちのつながりづくり」をテーマに先進校校長を招いた講演会とともに六つのグループ(学習指導、英語・外国語活動、生徒指導、人権教育、特別支援教育、児童会生徒会活動)に分かれた意見交換会を実施し、校区の教職員が校種の枠を超えて日頃の指導内容等の共通理解を深めました。その後も小中学校の研修担当者による全国学力・学習状況調査結果の校区小中合同検証や生徒指導担当者による規範意識向上への一貫した取組の検討などを実施しています。さらに、英語・外国語活動では、中学校の英語科教員が小学校外国語活動の授業に定期的に参加するとともに担当者による実践交流を実施するなど、校区の教職員がそれぞれの立場で相互交流を行う機会を設けるようにしています。

この他、「子どもの学びと育ち」をテーマに校区の保護者等への講演会、校区小学校六年生一日中学生体験、園児児童の中学校行事見学等の交流活動も実施しました。

一方、各学校運営協議会での共通理解を図るため、学校運営協議会を合同で開催したり、各学校運営協議会委員代表者等で今後の新

たな中学校区の仕組みづくりに向けた協議を重ねたり、地域とともに幼小中学校園の連携を進める基盤づくりにも取り組みました。

また、校区の各小学校長と学校運営協議会委員長等で、幼小中連携・一貫教育の県外先進校視察や校区幼小中学校園の連携を啓発するリーフレットの作成等も行い、PTAや地域等への幼小中学校園連携等の浸透を図りました。

### 三 地域とともにある学校づくりに向けて

学力の問題をはじめ教育を取り巻く課題が、多様化・複雑化・困難化する中、校区の幼稚園・小学校や家庭・地域と一層連携協働した学校づくりの進展は、とても重要と考えます。今後、教職員の意識改革をさらに進めるとともに地域に溢れる様々な資源の教育活動への活用や地域の主体的な学校支援の活性化を図る等、学校と地域とがパートナーとして手を携えながら、学校教育活動の質の充実と中学校区の連携を生かした学校づくりを推進していきたいと思えます。



# 県教育委員会との懇談会

## 「学力向上の取組」

## 「働きやすい職場に向けて」をテーマに

平成二十七年十一月十一日(水)

於：県教育委員会室

小中学校長会役員と県教育委員会教育長および幹部との懇談会が、県教育委員会において行われましたので、その概要について紹介します。

加田会長、山口教育長の挨拶に続き、山口学校教育担当次長から「本年度の全国学力・学習状況調査の分析及び学力向上に向けての施策」について全国学力・学習状況調査結果分析報告書（ガイドブック）をもとに説明がなされました。その後、和やかな雰囲気の中



加田会長あいさつ



山口教育長あいさつ

それぞれの地区・学校での取組状況等をもとにした懇談が始まりました。

### ◇山口学校教育担当次長の説明

本年は、全国学力・学習状況調査開始以来、正答率や無解答率に劇的な改善が見られ、組織的な取組が非常に進んだ一年であったと考えている。また、質問紙の部分こそ実践的な宝の山だと思っていると、児童生徒の質問紙の結果を見ると、主体的な学びがかなり改善されており、嬉しく思う。ただ、

自発的な読書や家庭での学習時間が短く、スマホの使用時間が長いなど、今後の大きな課題である。また、学校質問紙の結果を見ると、授業での「めあての提示」と「振り返り活動」、「校長の授業の見回り」が大幅に改善されている。

平成二十一年と比較して、学力が著しく向上した学校とあまり変わらなかった学校を比較したとき、次のような取組に顕著な差が見られた。

- ・資料を使って発表ができるよう指導
- ・発展的な学習の指導（国語、算数）
- ・実生活における事象との関連を図った授業（算数）
- ・目的や相手に応じて話したり聞いたりする授業（国語）
- ・一斉読書の時間の設定（朝の読書など）
- ・地域の人材を外部講師として招聘した授業
- ・学校図書館を活用した授業
- ・自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導等

また、一方で、自己肯定感や学習意欲などで、まだ課題が多いというのが分かった。

三重県らしい総合的な教育を今後さらに進めていきたいと考えている。

### ◇意見交換

#### (一)「学力向上の取組」

○学校が魅力ある地域の文化を発信できるように、ネットワーク支援事業をやっているが、予算の関係で打ち切らないよう長いスパンで継続していくことが必要だと考えている。

○小学校英語に関しては、高学年が教科型、中学年が体験型で、いずれも学級担任が主になって専門性を高めて指導する方向になっている。他県の小学校長から「小学校高学年の担任を希望する者が、最近非常に少なくなってきた。将来、英語が入ってくる」と、きちんと指導ができるか不安の声が多い」というようなことを聞いた。三重県としては、導入までの道筋や校長のやるべきこと、英語のテスト実施等を検討していかなければならない。

○総合教育センターから中央研修に派遣された者が講師となつて、各校の代表に対する研修を行う予定である。また、「ネットDE研修」や「中学校との連携」などの工夫をしながら、小学校の先生方が自信を持って英語教育にあたるように研修を進めていく。さらに、コンテンツの準備や外部の人を入れることも検討したい。

○県教委で準備していただいたことをやれば、本当に成績が上がった。まず、保護者の協力をどれだけ得られるかが非常に大事である。そのために、今求められている学力を学級や学校の便りで説明し、協力を得るようになっている。次に、授業改善が大事である。めあてと振り返りをすべての教科で徹底すること、授業の自身をどうしていくかということを引き続き考えていく。最後に、いろいろな力を借りることも大事である。多くの人に授業を見てもらった、子どもたちに話してもらったつたりすることによって学力が非常に伸びる。

○授業改善はもとより、学習規律、学習習慣の徹底と定着を今年のテーマにして、中長期的に取り組んでいる。校区の小中学校、保育園が集まり研修する場があり、十二年間を見通した読書活動、学習規律と学習習慣に対する取組を徹底していこうとしている。

○小規模校の先進事例を見ると、教育機器やタブレットの導入は非常に有効であると感じている。財政的に厳しいとは思いますが、よろしく願いたい。

(二)「働きやすい職場に向けて」  
○新しい職として主幹教諭を配置



していただいた。主幹教諭が教務主任をしている学校では、教頭と共にミドルリーダーとして研修会などを引っ張っている。また、主幹教諭が配置されたことで組織に厚みができ、学年主任への指示や若い教員への指導助言などを的確に行っている。

○主幹教諭の配置により、教頭の労働時間軽減にも役立ててもらいたいと考えている。

○校長先生方も、地区の校長会で同僚性を持ち、互いに連携し助け合いながら、身体とメンタル面に留意してほしい。

出席者

三重県教育委員会

教育長

山口千代己

副教育長

信田 信行

教職員担当次長

木平 芳定

学校教育担当次長

山口 顕

研修担当次長

中田 雅喜

育成支援・社会教育担当次長

中嶋 中

教育総務課課長

長崎 敬之

学力向上推進PT課長補佐兼班長

水野 和久

三重県小中学校長会

会長

加田 普士

副会長

森田 正美

幹事

藤井 光昭

幹事

高木 学

幹事

鏡 仁治

幹事

北村 吉洋

幹事

西田 尚史

幹事

濱田 嘉昭

幹事

樋口 巧

幹事

中川 博文

幹事

川合陽一郎

幹事

市橋 秀介

幹事

中村 泰彦

幹事

福田 徳生

事務局次長

中川 正生

事務局次長

大西 学

本部役員だより

一年を振り返って思うこと



三重県小中学校長会  
小学校部会長 森田 正美

「啐啄同時」(ひな鳥が卵の殻を内側からつつく「啄」と、親鳥が外側からつつく「啐」が同時であつて初めて殻が破れて中からひな鳥が生まれてくる)という禅語があります。また、これは、教育の真髓を表す言葉でもあると、私は思っています。つまり、「できるようになりたい」という子どもたちの「啐」に、適切に支援の手を差し伸べてやる教師の「啄」があれば、きっと子どもは意欲を持って学びに取り組んでいくのではないかと思うからです。

しかしながら、学校とそれを取り巻く環境との関係は、「啐啄同時」とはいかないようです。とりわけ学校現場では、「全国学力・学習状況調査およびそれに関わる施策」「道徳の教科化」「学

習指導要領改訂に向けて審議の本格化」「新しい人事評価制度の試行」「新しい職の設置」「土曜授業の実施」など、校長は、進行する教育改革への対応にいとまがありません。

私たち校長は、この教育改革の流れを受け身ではなく、その本質をつかみながら、学校経営の責任者であるという高い意識のもと、適切に対応すべく、学校および校長会として、組織をあげて取り組んできました。

その中で、本年度の全国学力・学習状況調査において、本県では、全国の平均正答率には及ばなかったものの、前回からの変動において、全国トップクラスの伸びを示しました。この結果に対して、県の教育委員会からは、「山(学校)

が動いた。中でも校長のリーダーシップを熱く感じた。今後に期待したい。」との意見が出されました。

これは、三重県小中学校長会が三重県教育委員会と連携し、ワークシートを各学校へ配付し、校長のリーダーシップのもと教職員が一丸となって、「わかる授業」や「個に応じた指導」に真剣に取り組んだことの大きな成果であると言えます。今後も、私たち校長をはじめ教育に携わる者は、「毎日が未来への分岐点」との認識のもとに、「わかること」の喜びを実感できること」を大切にしながら、子どもたちの能力を最大限に引き出すよう取組を進めていかなければなりません。

三重県小中学校長会は、正に今、教育の大きな変革期であることを認識し、組織力を生かし学校現場からの声を大切に、関係諸機関や関係団体との連携、会員相互の連帯のもと、諸課題の解決に向け取り組む継続しなければなりません。

会員の皆様には、この一年、三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げますとともに、次年度も引き続きよろしく願います。

# 私の薦める二冊

## 『フライト・ゲーム』

志摩市立浜島中学校

校長 市川 和利



早いもので教師生活を三十四年も続けさせてもらっている。最近退職を意識しているせいなのか、時々仕事を振り返る。

なんと多くの方々に支えていただいたことか。縁の不思議さと運の強さを感じる。その方々のおかげで今があると感謝している。縁とはありがたいものである。その中でも、一番大きなものの一つに松葉健司先生との縁がある。十数年前の野球部顧問の時に、久居農林高校野球部監督の松葉先生とのご縁をいただいた。その出逢いは山崎長敏先生（現的矢小学校長）が作ってくれた。感謝・感謝である。

穏やかな方である。ご存じのように、久居農林高校（平成十四年）、松阪高校（平成二十四年）を甲子園に導いている監督でもある。当時、彼は南勢地域によく足を運んでいた。いくつかの中学校を

周り、生徒募集をしていた。会うたびに学ぶことが多く、いつも引き込まれた。

彼は「心」についてよく話をしてくれた。「知性」「感情」「意欲」の関連を手がかりに、生徒たちへのアプローチの仕方を説明してくれた。

指導者の人間性を高めるための方法を教わった。その一つの読書では、「致知」という雑誌や「みやざき中央新聞」を教えてもらった。いい雑誌や新聞である。

彼からは「人間学」を学んだ。行動力、人を育てる視点や方法教育の目的など、彼の教えはそれ以降の私の仕事の柱となった。実践の裏付けとなった。

そんな松葉先生が平成二十五年の十一月に自費で『フライト・ゲーム』を出版した。

内容は、ある日双子の高校生姉弟に一通のメールが届く。それは未来の自分からのメール……。

二人の成長をそれぞれの視点から描く体験型小説である。

小説のあとがきで彼はこう語る。「日々子供たちを見ていますと、その素晴らしさに感動させられます。好奇心があり、寛容であり、なにより賢いです。ましてこの情報過多の時代に、懸命に生きています。子供たちが生きていく中、少しでも楽しく自分と向き合えればと思います、この本を書いてみました。（後略）」

生徒をはじめ若者を育てる視点満載の本である。家庭でも仕事

でも人を育てる立場のすべての人に役立つ本だと思う。

校長会の皆様にも自信を持って薦めできる一冊である。残念ながら一般書店では売っていない。読書のすすめ（ネットでの書店等）などを検索して、ぜひ読んでほしいと願う。

# 随想

## さまざま、さすらいの教員生活に感謝

松阪市立松ヶ崎小学校

校長 浅沼 博



三十八年前、私の教員生活は四日市市の小学校から始まった。五年生三十八名の担任として教壇に立ったときの情景が今でも蘇ってくる。

私の教員生活の始まりはあまり平坦ではなかった。誰でも何かしら壁にぶち当たるのだから変化は

当たり前なのだが、五年目には同市の中学校にいた。そこに至る四年間に、組合の執行委員や三重大学への内地留学を経験していたのだから、落ち着かない私の性格そのもののような動き方だ。そして、七年目には念願の養護学校（当時の名称）に赴任することになった。

「障がいのある子の教育は教育の原点である」ということが言われているが、教員として自分の居場所にさまざまだった当時の私は、そこに活路を求めていたのかもしれない。そこで出会った子どもたちは、一人一人がとてつもなく個性的で、内地留学で学んだことを駆使して悪戦苦闘したが、とても歯が立たなかった。そんな時、多くの先輩や仲間から知恵と勇気をもらい、無我夢中で子どもたちと向き合っていた。気がついたら十六年が過ぎていた。そこでは多くのことを学ばせてもらったと思う。

子どもをよく見ること。子どもの声をよく聞くこと。保護者の思いを受け止め、寄り添うこと。仲間とつながっていくこと。などなど。ようやく私の教員生活の土台は築かれたかなと思っていたら、県教育委員会への辞令が出て、またさまざまの生活が始まった。そこでは好むと好まざるとにかかわらず、トップダウンの仕事が多く、かつ子どもの前に立たない日々が九年間続いたため、自分が教員であるというアイデンティティーはすっかり崩れ去ってしまった。

その後、再び小学校に戻ることで

ができ、教員として息を吹き返したわけだが、振り返れば、さまざま、さすらいの教員生活であったと思う。その中で多くのことを学ばせてもらい、多くの素晴らしい人たちと出会わせていただいたこと、そして三十八年間勤めさせてもらったことに、心から感謝したいと思う。

## 母校への思い

### 閉校から開校へ

伊賀市立城東中学校

校長 山田 政普



先日自身の中学校時代の同窓会の案内が届きました。数年前に一度開催されたのですが、そのときはあいにく参加できず今回初めての参加でした。いわゆる「還暦」を前にしての実に四十五年ぶりの再会で感極まる機会を得ることになりました。振り返ってみると、幸いにも私が卒業した母校は小学校、中学校、高等学校、大学とすべて校名も変わらず現在も残っています。多くの学校が統廃合によりなくなりつつある現状では奇跡的と言えるかもしれません。

今勤務する本校も統合により七年前に新しく開校されました。私

自身は閉校となった中学校で教頭として勤務していましたが、その年には地域や卒業生と思われる方々からたくさんのお問い合わせやご意見が寄せられました。「廃校になるって聞いたが本当か、誰が決めたのか」という強い口調の電話もいただきました。「すでに市議会で決定されて……」と冷たい返事で応じていました。母校への深い思い入れと母校がなくなることへの憂いに思いを馳せることができなかつたことを後悔とともに思い出されてきます。

開校と同時に本校に生徒とともに転勤することになりました。二つの学校がなくなり、隣接する別の中学校の一部校区が編入されるというやや複雑な再編計画による統廃合でした。開校を前にして、私たち教職員は、新入生を含めすべての学年の生徒が新しい環境に適応して安心・安全な学校生活を送れるために、想定できるあらゆることについての準備を進めてきました。開校当初は、新入生に加え四種類の制服が入り混じり、見た目はモザイク状態の状況で行事や全校集会が行われていたことが思い出されます。そうした中でも生徒たちは互いに理解し合い仲良く生活する姿を見せてくれました。

三重県に採用され最終の今年までずっと中学校現場での勤務となりました。四月からの生活はまったくの白紙ですが、先輩、同僚、そして生徒たちに恵まれた日々を改めて感謝しています。

# あの時、あの人

## つながりこそ財産

伊勢市立神社小学校  
校長 野垣内 宗



私も残り二年となった。このようなテーマをいただいて書くとなると、これまで前だけ向いてひょうひょうと生きていたのに、そんなに歳をとったんだなと感じてしまう。決して自慢できることもないが、お礼の気持ちで書いてみたい。

今年から三重県美術教育研究会の会長をしている。ここに導いてくださったのは元校長で今も活躍されている林徳一先生（退教互だよりの表紙絵）とのつながりだ。新採で津市の小学校に勤めたとき林先生は組合の活動もされ、次に三重県総合教育センターに指導主事で行かれる頃だった。忘れもしない、男子ロッカーで着替えながら先生は「のがちゃん、大学で教育法を勉強してきたようだけど、何か教科で得意なものをもつとい

いぞ。一緒に図工の勉強せえへんか。」と誘ってくれた。普段から尊敬していたので言われるまま研修講座に通い、全国の美術教育大会に参加し、県教研や三美研で実践家たちとつながっていった。やがて三重県立美術館が「三重の子どもたち展」をするようになって県内の仲間ともつながった。

同時期に林先生に付いて（運転手をして）、県内各地のスケッチにも出かけた。その頃先生から「絵を描くと、絵を描く子の気持ちや、描けない気持ちかわかるんや。」と聞いた。納得である。自分が描くと真っ黒になっていく。それなりの絵になるには数年はかかった。それから、工作の方でも「子どもの作る時間の目安は、大人がかかる時間の三倍以上や。やってみやなわからんな。」楽しくなるところや、踏ん張って乗り切らなければいけない場所がやればわかった。それがあったから子どもたちに心底「がんばったなあ」と言えた。

現在も林先生とはスケッチを一緒にさせてもらっている。そして先生の歳をとるにつれ鮮やかになる色づかいの極意をぬすもうと勉強させてもらっている。

他にも十校ばかりの異動の中で、たくさん先輩や同僚から教えられたことが多く、その校区や

地域で知り合いになった方からも支えられた。ミニバス・カメラ・吹奏楽・習字、伊勢エビ漁・タコ漁、和太鼓等々。その半面、自分が後輩の役にたち、育てたという実感も満足も未だない。ただ振り返って思い出すみんなは全て笑顔で、私は幸せな奴だと思っ

## よし、これでいこう。

大紀町立大紀中学校  
校長 山口 真也



「五年の総合は終わり、やつと一息つけると思ったら六年があるし、その次があります。『ふう、終わった。』と言えるのはまだまだ先のことです。」

これは総合的な学習の時間にグループで地域の福祉をテーマにし、老人施設を学習対象としたT児が、一年間の学習を終えて書いた文章の一部です。

私はなぜこのような思いになったのかを探るため、T児の一年間の学習ファイルやその時々書いた文章を読み返し、詳細にレポートにして次年度当初の校内研修に提出しました。

「はずかしがりやで質問できなかった分は見て調べておぎなつつもりです。」と一学期の終わりに振り返っていました。

二学期にはお年寄りの方と一緒に遊ぶ計画を立てて実行しました。「一番うれしかったのは老人の方たちがとても喜んで楽しんでくれたことです。……今度はもっとすごいのを作りたいです。」と書いていました。T児は遊びの進行役を務め、お年寄りの方と手を取りながら遊びました。

これらの記録からも、実際私が見てきたT児の学習の様子からも冒頭のことばが出ることは考えられませんでした。この学習でT児に身につかせようとした力が不明確であり、実際T児もこういう力がついたと実感できなかったのだと思います。具体的な指導の手だての未熟さなどを全教員で探ろうという研修になりました。

その校内研修では様々な意見が出たことを覚えていますが、忘れられないのがN校長の一言「よし、これでいこう。」でした。このことばの意味はこの学習の指導の方法のことではなく、研修の進め方のことでした。私が一年間T児を見続けながら記録を取り、その時々においてT児を理解しようとしたことを評価していただいたことばでした。そして「子どもの学びを追う」ことを研修の中心に据え、全教員が子どもたちの記録を取りながら授業を構成して実践する研修へと進んでいきました。

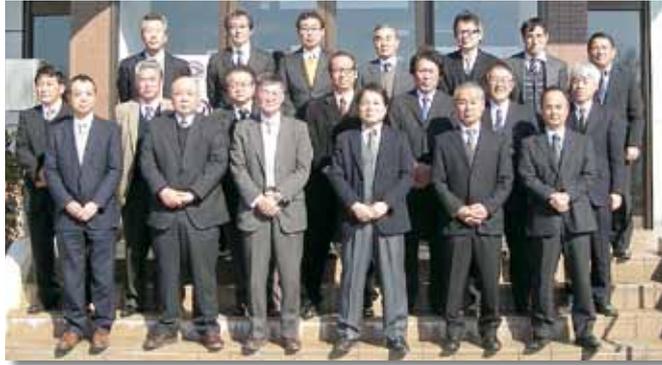
# 地区校長会だより

## 多気郡小中学校校長会

大台町・多気町・明和町の三つの町からなる多気郡は、三重県の中央部に位置し、大台ヶ原の麓の奈良県境から伊勢湾に面した平野まで山・田畑・海ありの自然に恵まれた地域です。大台町は小学校四校・中学校二校、多気町は小学校五校・中学校二校、明和町は小学校六校・中学校一校です。その中で、多気中学校は、現在では県下唯一となった多気町と松阪市の組合立の学校です。ただ、郡部の共通課題である児童生徒数の減少は気になるところで、小規模校も多く、学校統合の話も無縁ではなくなってきた地域もあります。

多気郡小中学校校長会は十五小学校長と五中学校長の二十人で組織しています。小中それぞれ校長会を組織していますが、活動は主に多気郡小中学校校長会として共に行っています。

各校長は、校長会役員の他、郡教育研究会、郡特別支援教育研究会、郡小中学校人権・同和教育推進協議会、郡学校保健会等々、いくつかの教育関係団体の責任者と



なっています。さらに、三町それぞれにおいても、教育関係団体や町の様々な審議会や協議会の委員や幹事を兼務し、一人何役も担当しています。

郡小中学校校長会の定例会は年七回開催され、多気郡教育委員会連合会より三町教育長（輪番）による教育情勢に関する講話、多気郡教育指導室所管事項説明、県校長会・教育関係団体報告、学力向上の取組や土曜日の授業の実施をはじめ、学校運営に関する今日的な

課題についての意見交換や情報交換を行い、連携を深めています。行政組織は異なりますが、知恵を出し合える活発な校長会運営を進めていきたいと考えています。

## 鳥羽市小中学校校長会

### フレッシュな校長会

今年度、六名の新任校長を迎えました。総勢十四名ですので、新任率は最近では類を見ないものがあります。

しかも、鳥羽市は離島の六校を含むため、会議等の時間設定も定期船のダイヤに配慮した大変タイトなものになります。校長の職務について十分な情報交換ができていく環境にあります。

### テーマは「連帯」

意図的で有意義な校長会運営をするために、年度初めに鳥羽市校長会としての運営方針を確認しました。

テーマは「連帯」。以下の点で共有を図りました。

- ・各校の研修テーマ、計画
- ・年度初め各校経営方針
- ・（校長発行の）学校だより
- ・中学校区を単位にした「小中連携」「小小連携」
- ・学調結果の調査分析

### 今までの校長会

校長は、ともすれば「お山の大将」になりがちです。となりの校長は、どう学校経営をしようとしているのか、職員や生徒、保護者に何を発信しているのか。よく知らないまま自己流の校長業をこなしている事が多いのではないのでしょうか。

校長会が果たす役割

まだまだ十分な成果には至っていませんが、校長会としての連帯感、また、他校の校長からも学ぼう、盗もうという姿勢は徐々に芽生えてきているように思います。

今、教育界の変革は大きなうねりとなって学校現場を襲っています。校長会が組織力を高め、子どもたちの立場に立った実りある改革になるように、是々非々で取り組んでいきたいものです。



## 編集後記

例年になく暖かい日が続いており、春の兆しも随所に見受けられるこの頃です。早いもので今年度最終の三重県小中学校校長会広報の第42号を発行することとなりました。さて今年度も学年末を迎え一年間のまとめをし、来年度の取組を方向づける時期になりました。県を挙げての学力向上の取組も、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックからの課題を踏まえた実践が、子どもたちの成長に直結したものとならねばなりません。また、新たな人事評価制度の試行も、教職員のやりがいにつながる評価でありたいと思います。目指したゴールに向けて、教職員一丸となつて取り組んでいきましょう。

「校長会みえ」も計画通り年三回の発行を無事に終えることができました。先生方には、原稿執筆や執筆依頼等様々な形でお世話になりました。来年度も、様々な課題解決のために力を合わせ前進し続ける校長会であり、その情報を共有できる広報誌であってほしいと願っています。

一年間本当にありがとうございました。